

別紙① 戦争体験証言者候補と体験談の概要

※個人情報保護のため、戦争体験証言者候補名・体験談の聞き取り調査票は、本業務の契約業者のみに公開します。また、戦争体験証言者は、あくまで候補であり、体験者の健康状態などにより、体験者や制作内容に変更が生じることがあります。

【証言 1】『ハルビンの満鉄病院看護婦養成所から八路軍看護要員まで』

証言者 A さん（女性・栗東市）、昭和 4 年（1929 年）生まれ

体験談の概要：

長崎県に生まれ育った A さんは、看護婦（現在の看護師）に憧れ、国民学校高等科卒業後の昭和 19 年（1944 年）、友人 2 人とともにハルビンの満州病院看護婦養成所に入所し、看護の勉強に励みました。

しかし、昭和 20 年（1945 年）8 月のソ連侵攻により満州は混乱し、死体を運ぶトラックが行き交うなど荒廃していきました。やがて中国の内戦にも巻き込まれる中、八路軍の看護要員となっていた友人の助言を受け、A さんも八路軍に加わります。

八路軍には日本の開拓団の人々も多く参加する中、旧ソ連と国境を接するジャムスや上海、内陸の長沙など各地で負傷兵の看護に従事しました。平津戦役では大きな苦労を経験しました。また、「日本語を話してはいけない」とされる地域もあるなど、かつての戦争の傷跡を実感しました。

帰国後、A さんは故郷・長崎へ戻りましたが、街は変わり果てていました。

資 料：体験談の聞き取り調査票

制作意図：戦時下の看護婦養成と戦後の内戦に巻き込まれた体験を後世に伝える

盛り込む内容：①看護婦に憧れた女子

②八路軍に従軍。内戦に巻き込まれた様子

【証言 2】『戦時下の八日市と学徒動員の女学生』

証言者 B さん（女性・東近江市）、昭和 5 年（1930 年）生まれ

体験談の概要：

昭和 5 年（1930 年）B さんは、八日市の街で古くから茶問屋を営むお店の長女として生まれました。八日市尋常高等小学校を卒業後、愛知高等女学校へ進学しました。幼い頃には、近くの八日市飛行場で開かれる飛行場祭りや、出征兵士の見送りの様子を目にして育ちました。

昭和 16 年（1941 年）、太平洋戦争が開戦すると、B さんの父のもとに召集令状が届きました。当時、B さんの父は 39 歳でした。家族を残して出征した B さんの父は、昭和 19 年（1944 年）、サイパン島で戦死されました。

やがて、Bさん自身にも戦争の影が色濃く及びます。愛知高等女学校在学中には、学徒動員により当時、落下傘を製造する高田工場で働くこととなりました。さらに昭和20年（1945年）には、高田工場周辺を襲った空襲も経験しました。

資料：調査票

制作意図：戦時下の八日市飛行場の街と高等女学校での勤労働員と生活を後世に伝える

盛り込む内容：①八日市の街並みと戦争
②彦根の高田工場の空襲

【証言3】『大阪空襲から逃れて —五個荘への疎開と収容所跡での仮住まい—』

証言者 C（女性・東近江市）、昭和13年（1938年）生まれ、他2名（弟妹）

体験談の概要：

大阪で暮らしていたCさんの家族は、昭和20年（1945年）3月の空襲で家を失いました。やがて父の実家がある滋賀県五個荘へ疎開することになりました。

五個荘の実家には、すでに多くの疎開家族が集まっており、Cさんの家族も親せきの家に分かれて泊まるなど、家族が離れ離れで暮らすことになりました。

終戦の日に疎開先の家へ戻ると、雨戸が閉められていました。これは、終戦によって解放された捕虜たちに備えるためでした。Cさんの住む地域の近くには、伊庭捕虜収容所がありました。

その後、捕虜の帰国からしばらくして、Cさんの家族は収容所跡に移り住むことになりました。壁は板張りで、隙間風が入る建物での生活は過酷なものでした。寒い冬は布団の上に雪が積もったこともありました。そこにCさん家族は身を寄せ合って暮らしていました。昭和23年（1948年）に転居するまで、そこで生活を続けました。

資料：体験談の聞き取り調査。

制作意図：大阪空襲と疎開先・五個荘での暮らし、戦後の様子を後世に伝える

盛り込む内容：①大阪空襲から五個荘へ疎開
②戦後の捕虜収容所での仮住まい

【証言4】『城南国民学校を襲った空襲』

証言者 Dさん（女性・彦根市） 昭和8年（1933年）生まれ

体験談の概要：

昭和20年（1945年）6月26日午前9時半頃、アメリカの爆撃機B-29の編隊が彦根上空に飛来しました。そのうちの1機が彦根市にある城南国民学校の上空に差しかけた際、日本軍機の攻撃を受け、B-29が搭載していた爆弾が学校付近に落下しました。この空襲により、10名が死亡、10名が負傷したと記録に残されています。

当時、城南国民学校6年生だったDさんは、校長から「警戒警報が出ているので家に帰りなさい」と言われ、帰宅していました。空襲後の学校では、ほとんどの教室で天井が崩れ

落ち、窓ガラスも割れてしまい、授業ができる状態ではありませんでした。

城南小学校には、この空襲によって傷ついたロダンの像が今も残されています。

資料：調査票、2025年8月17日毎日新聞「市内一安全といわれた学校に『落とされた』爆弾 今も拭えぬ恐怖」

制作意図：戦時下の学校生活と彦根市城南国民学校を襲った空襲を後世に伝える

盛り込む内容：①戦時下の城南国民学校と学校生活
②昭和20年6月26日の城南国民学校周辺を襲った空襲の様子

【証言5】『戦時下の学校教育から海軍経理学校での学生生活』

証言者 E さん（男性・大津市） 昭和5年（1930年）生まれ

体験談の概要：

横浜市出身の E さんは、父親の職務の都合により、兵庫県鳴尾地域や大阪府四条畷市などを転々としていました。10代の夏には、甲子園において開催された全国中等学校野球大会を楽しみに観戦していました。

太平洋戦争開戦の翌年、Eさんは大阪府の四条畷中学校に進学。在学中は、楠木正行が父・楠木正成の教えを受け継いで戦い抜いたとされる「小楠公精神」の教育を受け、精神鍛錬が行われました。これは、戦時下において「滅私奉公」の象徴でした。また、中学校在学中の勤労働員では、砲弾の信管製造に従事しました。

昭和19年（1944年）、志願して海軍経理学校予科に入学し、1年間の基礎教育を経て本科へと進学しました。奈良の学校の校舎を接収して使用していたが、入学後約4か月で終戦を迎えました。

戦後は、復学したのちに三高（今の京都大学）へ進学し、研究の道へと進みました。戦後80年を過ぎた現在も、平和への思いを語っておられます。

資料：聞き取り調査票。

制作意図：戦時中の旧制中学校の教育と勤労働員のほかに、海軍経理学校での様子を後世に伝える

盛り込む内容：①中学校時代の小楠公精神と勤労働員
②海軍経理学校時代

【証言6】『憧れのパイロットを目指した少年の歩み』

証言者 F さん（男性） 昭和2年（1927年）生まれ

体験談の概要：

Fさんの学生時代は、既に戦時下にありました。Fさんが在学していた旧制八日市中学校での軍事教練は、非常に厳格であったといいます。農家に生まれ、6人兄弟の4番目であったFさんは、軍隊に入れば生活に困窮しないとの考えから、同校を中途退学し、かねてより憧れていたパイロットを目指します。

昭和 18 年（1943 年）10 月、海軍の予科練習生として三保海軍航空隊に入隊し、その後、偵察員としての訓練を受けました。燃料不足の影響により、「飛行機のガソリンがない」といわれ、昭和 20 年（1945 年）5 月頃からは陸戦隊の訓練へと転換されました。訓練は、箱型爆弾を抱きかかえ、上陸した敵の戦車に対して突入することを想定したものでした。

資 料：聞き取り調査票

制作意図：戦時下の学校生活と昭和 18 年以降の予科練習生の訓練を後世に伝える

盛り込む内容：①戦時一色の中学校での授業
②海軍予科練習生としての訓練と陸戦隊の訓練